

SRID NEWSLETTER

No. 344 July 2004 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内
URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

7月号

危機管理、海外安全と自己責任
マンション建替え始末

小椋紹也

ユニコ・インターナショナル(株) 佐藤光男

お知らせ

1. 夏季シンポジウム

開催日：7月24日(土) 場所：一ツ橋学術総合センター
シンポジウム議題：『これまでの30年 これからの30年 世界の中の日本』
出席・欠席の連絡を7月9日(金)までに事務局 三上 (sridjimu@par.odn.ne.jp)
及びシンポジウム幹事(西村：Nishimura.Emiko@jica.go.jp及び小川：rrogawa@jbic.go.jp)までご連絡下さい。

2. 幹事会 9月13日(月)

3. 会員異動 小林 一 さん

独立行政法人・都市再生機構 経営企画部担当部長

4. SRID 婦人クラブが創立20周年を迎え、ニュースレターが100号を数えました。ニュースレターに同封いたしますので、ご覧ください。

危機管理、海外安全と自己責任

小椋紹也

イラクで3人+2人が拘束された事件では人質となってしまった人たちの「自己

責任」論が一時、日本国中に渦巻いた。5人が結局は無事に保護、救済されたのであったから、自己責任論はともかく、その後に発生した米国人、韓国人の殺害という悲惨な事態に比べれば、まことにハッピーな結末であったろう。

今回のイラクでの日本人質拘束事件に関連、各人、特に海外に駐在、滞在している人々の危機管理と自己責任について若干の考察をしてみたい。

国内においてもまったく皆無とはいえないであろうが、海外での勤務を余儀なくされる駐在員やODA関係者たちははるかに多くの危険にさらされている。いつテロあるいは、ハイジャックまたはそれらに相当する危険に巻き込まれるのか、まったく余談を許さない。危険を承知で勤務しているわけであるから、常日頃、危機管理には十分意を尽くして業務遂行なり、日常生活を送るべきであろう。NHKでは毎日定時に「海外安全情報」を流し、駐在者、旅行者たちの安全意識を注意喚起している。

さて、自己責任論である。一般に、日本人は自己責任の意識が低い国民と考える。「自己責任」意識が希薄なために、「危機管理」意識も希薄になっている。

イラク人質事件では「救出費用の自己負担」の観点から自己責任を問う声が多く識者から上げられた。例えば、登山中に遭難した場合、救出費用は自己負担である。同様に、救出された人質は救出費用を負担せよ、との声が大きく上がった。しかし、救出費用を負担しさえすればそれで自己責任を果たしたといえるのだろうか。自己責任を全うするためには不測の事態が起こらないように十分な「危機管理」を事前に図ることが必須であろう。この点に関しては、イラク人質たちは極めて危機管理意識に乏しく、あなた任せの人生よろしく、ふわっとイラク入りしてしまった。挙句の果ての拘束であった。ある意味では彼らは典型的にナイーブな日本人であった。

あなた任せ、といえば、自動車の行き来が少ない横断歩道での日本人の行動に端的に表れる。車がまったく来ないのに、赤信号であれば、辛抱強く青に変わるまで待っている。自己判断ではなく、あなた（信号）任せである。ニューヨークの五番街などでは赤信号でも、人々は安全と判断したら、平気で渡っていく。自己判断、自己責任である。赤信号で渡ってしまうというのは、子どもの教育上よろしくないのかもしれない。しかし青で渡っても、暴走車が突っ込んできて引かれてしまう事態もあろう。要は、信号任せではなく、自己判断、自己責任の概念が必要ということである。

1998年5月、インドネシアではスハルト政権崩壊に伴う混乱が生じた。ほ

とんどの企業勤務者、JICA専門家たち、およびその家族たちは、東京ご本社（本部）の命令で、シンガポールあるいは日本への避難を余儀なくされた。大変な人数のエクソダスであった。筆者は残念ながら（？）帰国命令を出してくださるご本社がなかったのので、自己判断で、結局、現地残留のこととした。現地にとどまった筆者のみならず、避難命令を受けた人たちの多くも、日本の危機管理担当者とインドネシア勤務の当事者たちとの危機についての温度差を感じていたのではないか。筆者には大会社のご本社やJICA本部の命令は「車の行き来のほとんどない赤信号」みたいに感じられたのであった。結論として、筆者の自己判断（自己責任が当然伴う）が正しかったことを確認できた出来事であった。

国内、海外を問わず、われわれは常に危険と背中合わせの中にいる。危機管理、自己判断、自己責任、という意識を常に持ち、あなた任せではない行動をとることが特に海外勤務者、海外渡航者たちにとってはこれからますます必要になっていくであろう。

マンション建替え始末

ユニコ・インターナショナル(株) 佐藤光男

小生の住んでいたマンションの建替えがこの11月で完了する。1971年に建った築30年の10階建て47戸のオンボロマンションが15階建て70戸になり、5階分の容積がアップされた。その部分売ることで建替えの建設費を捻出するので、前からの住民は同じ面積ならば自己負担なしで入ることができる。但し、2年間の建設期間中どこかで暮さなければならないが、その家賃は自己負担だ。それでも、我々のマンション建替えは、住民主導で行う建替えでは都内で初めての事例だそう。

旧建物の取り壊しから建替えの完了までは2年間だが、それ以前の準備には10年ほど時間が掛かった。バブルの時期に起った建替えの話が実現するまでにこれほどの時間が掛かったのは、バブル崩壊により建替えの財務的基礎となる土地の価格暴落に加え、コンサルタントとして雇った設計会社が住民の意向を無視して、デベロッパー候補の不動産会社の方ばかり向いて仕事を進めていたこと、などが外部要因。内部要因として、住民の意思統一過程での、公開の討議では一切の発言・意思表示をしないにも拘らず闇取引をする一部住民の存在、自分を偉いと勘違いした組合執行部の情報隠匿体質、公金の使い込み、などがあり、わが国の政治談議に出てくるあらゆる問題が小さな規模で出てきたことは大変興味深い。

2010年までに年期が到来し、建替えが必要なマンションは100万戸に達するらしい。我々のところは幸運にも容積率のアップで建替え資金が捻出できたが、大部分のマンションは以前と同じか、低い容積率での建替えを余儀なくされるらし

い。要するに住民が相当程度の新規負担をしないと建替えが出来ないのだ。又、建築後30年が建替えの目処になっているらしいが、何故コンクリートの建物が30年しか持たないのかは分らない。諸外国の例では100年を越えるコンクリート造の建物が未だに使われているのに、日本で建てられたものはなぜ30年程度で建替えが必要なのか。そうしないと業者が損するのか、戦後の施工が劣悪だったのか、マンションの補修が不十分だからなのか、その理由も明らかではない。

村社会の濃密な人間関係を嫌い、都会での、隣人との関係を絶った自由気侘な暮らし、鍵一つで戸締りが出来る簡便さ、などに憧れて万人がマンションに仮住まいを求め、生涯の目標は郊外の一戸建て、というライフプランのために、マンション暮らしの間は極端に言えば隣とも挨拶も無い、という暮らしが、マンション建替えに直面して突然バラバラに勝手気ままに暮らしていた人々が、実は各個人の土地建物が共有という、従来の村社会でも考えられなかったしがらみに直面し、大好きなプライバシー保護とやらとのやりくりで狂奔せざるを得ない、という悲喜劇が将来沢山演じられることになる。

加えて、日本の不動産業界の顧客軽視の体質、そこに働く専門バカ（住民こそマンション暮らしのプロ・専門家であることを自覚していない）、大多数の住民が無関心層だという現実、建替え時期がきたマンションの住民のかなりの部分が資金的に余裕のない高齢者だ、という現実（小生のマンションでは60歳以上が半分、あと半分が賃貸目的所有者だった）、等々問題を難しくする要因には事欠かない。

偶々諸般の事情があつてマンションの建替えを経験したが、いずれ皆さんもマンション住まいならば直面することになる筈、乞う御期待。

ブータン王国ジグメドルジ国立公園

ハーバード大学植物学教授 有原 元博

ブータンに入国してまず驚いた事は、数字である。チー、ニー、サム、シー、ガー、ロック、ヒッチ、ハッチ、クー、ジューと発音するのである。ブータンの会計年度は毎年7月から翌年の6月までであり、ボーナスに当たるものは無く、国民皆自給自足していて自然保護が徹底しているのには驚く。そんな中で、ジグメドルジ国立公園は標高1,500メートルからブータンヒマラヤの7,000メートルの高峰まで（雪ひょうが生息している）高知県の広さであり、もう一つのブラックマウンテン国立公園（香川県とほぼ同じ広さ）と合わせて世界で最も美しい国立公園である。

ブータンの栢の木の下梅香る 有原 胡蝶
ヒマラヤの石楠花神の座を飾る 有原 胡蝶

ブータン国王は自家用機を操縦して各地を飛び歩いて国民と直接対話に熱心である。こんなに人々の心が美しい国がほかにあろうか。